

第5章：イエス様の栄光を見る

最終章では、イエス・キリストの体である教会全体への、神の壮大な目的を見ていきます。ヨハネによる福音書第17章20節から24節に、神のわたしたちへの目的が要約されています。この聖句箇所は、イエス様が父に祈っておられる場面です。「わたしは彼ら(使徒たち)のためばかりではなく、彼らの言葉を聞いてわたしを信じている人々のためにも、お願いいたします。父よ、それは、あなたがわたしのうちにおられ、わたしがあなたのうちにいるように、みんなの者が一つとなるためであります。すなわち、彼らをもわたしたちのうちにおらせるためであり、それによって、あなたがわたしをおつかわしになったことを、世が信じるようになるためであります。わたしは、あなたからいただいた栄光を彼らにも与えました。それは、わたしたちが一つであるように、彼らも一つになるためであります。わたしが彼らにおり、あなたがわたしにいますのは、彼らが完全に一つとなるためであり、また、あなたがわたしをつかわし、わたしを愛されたように、彼らをお愛しになったことを、世が知るためであります。父よ、あなたがわたしに賜った人々が、わたしのいる所に一緒にいるようにして下さい。天地が造られる前からわたしを愛して下さい、わたしに賜った栄光を、彼らに見させて下さい。」これらの5節を通して、信仰する者によってなる体、つまり、教会に対するイエス様の御心を知ることができます。またこの箇所では、イエス・キリストの体であるわたしたちに対する、神の全体的な目的が伝えられています。前章では、個々の信者という視点での神の目的を中心に見てきました。この章では、御子イエス・キリストを信じる共同体としての神の目的に注目していきたいと思えます。

特に、ヨハネによる福音書 17 節 20 章から 24 節にあるイエス様の祈りを顧慮して、イエス様が教会に対して望んでおられる 3 つのことをお話したいと思います。まず一つ目は、わたしたちが、父とイエス様と一つになることを望まれているということです。一つになることによって、わたしたちは完璧なものとなり得ます。次に二つ目は、イエス様が望まれる世界伝道の方法をこの節から知ることができます。すなわち、わたしたちが一つになることによって、父なる神がイエス・キリストをこの世に送ってくださったのだと、世界が信じるようになるということです。最後に、イエス様の願いは、わたしたちが完全な体となり、イエス様のおられるところに、わたしたちもまたあってほしいと書かれています。わたしたちが、イエス様の永遠の栄光を見るためであります。

教会に対するイエス様の御心を学ぶことで、わたしたちが、イエス・キリストの教会として何を望むべきか見極めてほしいとイエス様は願われます。わたしたちは、イエス様の栄光を受け、大いに、完全に、父そして御子に愛されています。わたしたちの内に、イエス様と同じ心、望みがあるとは、何という栄光でしょう！

具体的に言いますと、わたしたちの第一の望みは、一体となることであり、父と子にあって完全な愛で互いにを愛し合うことであるべきなのです。そして第二の望みは、一体となったわたしたちが、この世の救い主として、父なる神がその御子を送ってくださったという事実を、世界へ伝えられることとなるでしょう。そして最後の望みは、イエス様の永遠なる栄光を目の前で見ることができるよう、イエス様のおられる所にわたしたちも共にいることとなるのです。この章では、イエス・キリストの体である教会への、この 3 つの望みについて見ていきたいと思ひます。

まず始めに、わたしたちの望みは、イエス・キリストと一体になることであるべきです。イエス様は、教会を家族にたとえられています。イエス様を信じる人は、神の子ども、兄弟と呼ばれています（ルカによる福音書第20章26節、ヘブライ人への手紙第2章12節、ガラテヤ人への手紙第3章26節）。イエス様は、わたしたち人間と家族になるために、人となりました（ヘブライ人への手紙第2章13節から14節）。イエス様の家族は、一緒にいて、すべてのものを共有にして、そして、弱き者をとても大事にしているという点です（使徒行伝第2章44節、使徒行伝第4章32節、コリント人への第一の手紙第12章18節から27節）。イエス様の家族では、権力のある者が弱き者で、弱き者が偉い者だとされています（ルカによる福音書第22章25節から27節）。イエス様の家族には、不一致、分裂といったものはありません。家族の一員は皆、イエス様のことをよく知り、イエス様がわたしたちの存在の真髄だと知っているからです（コリント人への第一の手紙第12章25節、ヨハネの第一の手紙第5章20節）。イエス様はわたしたちの内におられ、わたしたちもまたイエス様の内にいます（ヨハネの第一の手紙第4章15節から16節）。このように、これらすべてを心に留めたとき、イエス様と一つに結ばれたいという望みが自然と生まれ出てくるはずなのです。

神は、イエス・キリストにあって、自分で決断をする自由と、神のくださった素晴らしい解放の中に生きる自由をお与えになりました。この自由があるからこそ、わたしたちは、互いに愛し合い、仕え合うことができるのです。前章で見たように、イエス・キリストにある完成を結びつける絆は愛なのです。ですから、イエス様を信じる者が、愛し合っていると思うのは当然のことなのです。わたしたちの互いへの愛が、わたしたちを一

つとするのです。

ここで、わたしが前章でお話した内容と、今この章でお話している内容とを区別したいと思います。わたしたちの互いへの愛について話をする一方で、わたしたちの愛の大きさが、所属する教会だけでなく、イエス・キリストに属する教会全体へと広がったという点をご説明したいと思います。

イエス・キリストの教会には、イエス・キリストを救い主と信じるすべての人々が含まれています。わたしたちの共通点はイエス・キリストであって、この共通点はほかのどのような共通性にも勝るのです。国籍、人種、性別、家族、習慣、社会的地位、経済的地位、学歴、どのようなものでも、イエス様という共通点に勝ることはありません。それだけではなく、イエス・キリストという共通点は、宗派の分裂をものぐのです。少し考えてみましょう。もし、イエス様を信じるすべての人々が、永遠の命を得られると本当に信じているのなら、わたしたちの教会にある99.9%の意見の相違は、なくなるのではないのでしょうか。救い主イエスに満たされて、お互いへの愛があふれ出ることでしょう。わたしたちは、イエス様以外の何かを知ることはなく、イエス様について以外、話すことはないのです。わたしたちの口には、絶えることなく賛美の歌があり、そして、救い主を知る人たちのだれとでも交わりたいと望むようになります。

わたしたちを一体へと導く愛について、一つ、具体的な例、相互関係のない教会同士が愛し合うことについてお話したいと思います（相互関係のない教会とは、危険な異端の教会や、聖書にもとづかない教会を指しているわけではありません。主流の聖書に基づいた教会で、たとえば、異なる宗派にある義務、所属、または、少し違う信条のある教会のことを指して

います)。わたしたちがイエス様を信じる者同士、お互いを兄弟、姉妹として、実際に見ているのであれば、新たな教会を建てて、拡大を重要視するよりも、すでに存在する教会への助けやいやしを重要視するのではないでしょうか。なぜ、長年に渡って、定着した教会がすでにあるところに、ほかにも多くの教会が開拓され、教会戦略が使われているのか、不思議ではないか。神が何か新しいものを求めておられると思うのでしょうか？神が教会の成長のために、より良い方法を求められおられますか？神が質よりも量を求めておられると思いますか？そうだとは思いません。教会が生き抜くために、競い合うことを神は喜んでおられません。また、教会の「成長」のために新しい方法を取り入れることを、神は喜んではおられないでしょう。イエス・キリストがただ唯一、成長への方法です。そして父なる神は、愛によって働くイエス・キリストへの信仰のみに関心を持たれるのです。海外で、すでに教会があるのに、新しい教会を定着させようと、数多くの宣教師が働いていることに驚きを感じます。すでに存在する教会を助ける方が大切ではありませんか？同じイエス・キリストを信仰する教会なのですから、愛に駆られ、苦しんでいる教会を助けに行こうと思いませんか？これらの弱い教会こそが、最も小さいイエス様の兄弟たちが数多くいる場所ではないでしょうか？新しく何かを始めるよりも、病気に苦しみ、傷つき、死に直面している人たちを助け、いやす方がよほど名誉のあることなのです。考えてみてください。イエス・キリストは病気に苦しみ、傷つき、死に直面している人たちを救うために、この世に来られました。イエス様は人類を投げ出して、ゼロからのやり直しなどされませんでした。わたしたちもそうあるべきなのです。弱き者を潰すのでなく、いやしを選ばなければならないのです。

しかし、すでに教会があるところに、新しい教会を建てる必要があるときもあります。ヨハネの黙示録第2章、3章に書かれてあるように、イエス様は、教会があまりにも堕落しているため、死に至ることもあるとはっきりとおっしゃっています。しかし、教会を破壊することは決してイエス様の御心ではありません。イエス・キリストは、教会が死に至って消え去っていくよりも、教会が力を取り戻し、生きることの方を望まれています。イエス様は、苦しんでいる教会を投げ捨てて、大きく、より良い教会戦略が練りこまれた教会を新しく建てること望んではおられません。それよりも、苦しんでいる教会をいやすことに、わたしたちが働きかけることを望まれています。これらのことをさらに明確にするために、旧約聖書から、出エジプト記第32章7節から14節、出エジプト記第32章30節から35節を見てみたいと思います。

「7主はモーセに言われた、「急いで下りなさい。あなたがエジプトの国から導きのぼったあなたの民は悪いことをした。8彼らは早くもわたしが命じた道を離れ、自分のために鋳物の子牛を造り、これを拝み、これに犠牲をささげて、『イスラエルよ、これはあなたをエジプトの国から導きのぼったあなたの神である』と言っている」。9主はまたモーセに言われた、「わたしはこの民を見た。これはかたくなな民である。それで、わたしをとめるな。10わたしの怒りは彼らにむかって燃え、彼らを滅ぼしつくすであらう。しかし、わたしはあなたを大いなる国民とするであらう」。11モーセはその神、主をなだめて言った、「主よ、大いなる力と強き手をもって、エジプトの国から導き出されたあなたの民にむかって、なぜあなたの怒りが燃えるのでしょうか。12 どうしてエジプトびとに『彼は悪意をも

って彼らを導き出し、彼らを山地で殺し、地の面から断ち滅ぼすのだ』と言わせてよいでしょうか。13 どうかあなたの激しい怒りをやめ、あなたの民に下そうとされるこの災を思い直し、あなたのしもべアブラハム、イサク、イスラエルに、あなたが御自身をさして誓い、『わたしは天の星のように、あなたがたの子孫を増し、わたしが約束したこの地を皆あなたがたの子孫に与えて、長くこれを所有させるであろう』と彼らに仰せられたことを覚えてください。14 それで、主はその民に下すと言われた災について思い直された。～～ 30 あくる日、モーセは民に言った、「あなたがたは大いなる罪を犯した。それで今、わたしは主のもとに上って行く。あなたがたの罪を償うことが、できるかも知れない」。31 モーセは主のもとに帰って、そして言った、「ああ、この民は大いなる罪を犯し、自分のために金の神を造りました。32 今もしあなたが、彼らの罪をゆるされますならば——。しかし、もしかなわなければ、どうぞあなたが書きしるされたふみから、わたしの名を消し去ってください」。33 主はモーセに言われた、「すべてわたしに罪を犯した者は、これをわたしのふみから消し去るであろう。34 しかし、今あなたは行って、わたしがあなたに告げたところに民を導きなさい。見よ、わたしの使はあなたに先立って行くであろう。ただし刑罰の日に、わたしは彼らの罪を罰するであろう」。35 そして主は民を撃たれた。彼らが子牛を造ったからである。それはアロンが造ったのである。」

この話の中で、主は、民の罪に非常にお怒りになり、彼らを滅ぼそうとされました。主はモーセにこうおっしゃいました。「それで、わたしをとめるな。わたしの怒りは彼らにむかって燃え、彼らを滅ぼしつくすであ

ろう。しかし、わたしはあなたを大いなる国民とするであろう」と。このように、民を滅ぼし、新しく造り直すのが、神の御心だったのです。モーセは、主の声を聞きました。彼は、主の御心を聞いたのです。モーセは、主の啓示を受け、新しい大いなる国、そして、その国を導く者となる召命を受けました。だれが神の御心を避けることができるでしょう？神の御心に背く愚かな者がいるのでしょうか？この聖句では、主の御心が明確に示されています。モーセへの召命は、かたくなな民と離れ、より大きな国を導く者となることです。モーセは当然、その召命と神の啓示を謙虚に受けると、わたしたちは思うでしょう。ところが、次に起こったのは、全く正反対のことなのです。モーセは召命を受け入れないばかりか、主に躊躇することなく、民の命を助け、彼らを赦してくださるようにと異議を申し出るのです。モーセは主の憐れみを懇願します。モーセは民が病気に苦しみ、傷つき、死に直面しているのを知っているのです。モーセは、心の底から彼らの命を懇願します。「新しい国を作るのをおやめください。すでにお作りになった国をいやし、お赦してください」と、モーセは、主にそう語りかけているかのようです。それだけではなく、モーセは民の命を救いたい一心で、彼らの命とモーセ自身の命を引き換えにするとさえ言います（32節）。モーセは、かたくなな民が滅びていくのを見るくらいなら、死んで地獄の苦しみを味わったほうが良いと言うのです。この神に反抗的な国は、主の御名を称えている国なのです、それだけで救済に値する価値が彼らにはあるのです。

わたしたちも、このモーセの心を持たなければなりません。わたしたち、そして、教会に与えられた神の啓示や召命が何であろうとも、愛はそれよりも無限に偉大なのです。「新しい教会ではなく、主よ、どうか今す

でにある教会をいやしてください。新しくより優れた先導者ではなく、イエス様にあるわたしたちへの主の御心が叶うように、主よ、どうか、今すでにいる先導者を生き返らせてください。ああ神よ、いやしてください。わたしは今、苦しみに満ちています！」

教会に必要なのは、イエス・キリストにある愛です。愛がわたしたちを一つとするのです。ヨハネによる福音書第17章20節から26節と、ヨハネによる福音書13章34節から35節を照らし合わせて見てみましょう。そこでイエス様の語られる、一体という意味が明らかになります。それは、わたしたちの互いへの愛から自然と生まれ出るものであるということです。イエス様の愛を受けるとき、わたしたちも自然と互いに愛し合うようになるのです。イエス様の教会への働きとは、すなわち、頭から足の先までが完全に愛で高められた体を作り上げることです。これがイエス様が教会でなされる御業なのです。イエス様が頭となって、わたしたちの中で働いてくださいます。そしてそれは、わたしたちが互いに、完全な調和と平和のもとに一緒に働けるためなのです（エペソ人への手紙第4章15節から16節）。

言うまでもありませんが、この教会全体が一体となるには、個々の教会からはじまります。もし、その教会が愛で結ばれていなければ、ほかの教会にこの愛を伝えることはできません。大きな業をなす前に、まず小さなことをなすべきなのです。わたしたちが小さな働きに信頼を置けないものであれば、イエス様は大きな働きを与えてくださりません。ですから、愛は、わたしたちの小さな教会からはじまり、体全体と広がっていかねばならないのです。つまり、個々の教会の完全な愛の結びによってのみ、この教会全体の一体化についても考えられるようになるのです。わたした

ち、信じる者が互いに愛し合うとき、その愛が自然とほかの教会へ、この世へと溢れ出ていくのです。

ここで、次へと進みたいと思います。わたしたち教会が一つになるとき、イエス・キリストの福音を世界に伝えたいと望むようにならなくてはなりません。この約束は、ヨハネによる福音書第13章34節から35章、第13章21節から23節にて語られています。ここで語られる内容が神に喜ばれる伝道です。ヨハネによる福音書第13章、第17章にある聖句をもう一度見て、おなじみの聖句、マタイによる福音書第28章18節から20節と比べてみましょう。

「34 わたしは新しいおきてをあなた方に与える。わたしがあなた方を愛したように、あなた方が互いを愛することだ。あなた方も互いに愛し合うためだ。あなた方が互いに対して愛を抱けば、35 これによってすべての人は、あなた方がわたしの弟子だということを知るだろう。」(ヨハネによる福音書第13章34節から35節)

「21 彼らがみな一つになるためです。ちょうど、父よ、あなたがわたしたちのうちにおられ、わたしがわたしがあなたのうちにいるのと同じようにです。それは、彼らもわたしたちのうちで一つになるためであり、あなたがわたしを遣わされたことを世が信じるためです。22 あなたがわたしに与えてくださった栄光を、わたしは彼らに与えました。わたしたちが一つであるように、彼らも一つになるためです。23 わたしは彼らのうちにおり、あなたはわたしのうちにおられます。彼らが完全に一つになるためであり、また、あなたがわたしを遣わされ、あなたがわたしを愛されたとお

りに彼らを愛されたことを、世が知るためでもあります。」(ヨハネによる福音書第 17 章 21 節から 23 節)

「18 イエスは近寄って来て、彼らに話して言った、『わたしには天と地のあらゆる権威が与えられた。19 だから、行って、あらゆる民族の人々を弟子とし、父と子と聖霊の名において彼らにバプテズマを施し、20 わたしがあなた方に命じたすべての事柄を守るように教えなさい。見よ、わたしは、この時代の終わりまで、いつもあなた方と共にいるのだ』。アーメン。」(マタイによる福音書第 28 章 18 節から 20 節)

この3つの聖句を注意深く読むと、イエス・キリストの伝道と宣教に対する御心がはっきりと見えてきます。マタイによる福音書第 28 章 18 節から 20 節は、通常、大宣教命令として、引用されます。わたしたちの任務、それは世界に福音を述べ伝え、弟子をつくることです(ルカによる福音書第 24 章 47 節、マルコによる福音書第 16 章 15 節もご参照ください)。しかし、世界に福音を述べ伝え、弟子をつくるというのは、いったいどのような意味でしょうか？マタイによる福音書第 28 章 18 節から 20 節を注意して読むと、そこで答えを見ることができます。イエス様は弟子に、彼が命じたすべての事柄を守るよう世界に教えなさいと語られたのです。では、イエス・キリストの命じた事柄とは何でしょう？それは、イエス様を信じ、互いに愛し合うことです。イエス様を信じることによって、わたしたちは救われ、そして、信じることによって、ほかのすべて、すなわち、洗礼、神聖、祈り、よき業、伝道がついてくるのです。しかし、すでに触れたとおり、イエス・キリストへの信仰の生み出す最も素晴らしい働きは、

愛です。イエス様のわたしたちへの愛を信じることで、わたしたちも自然に、溢れるほどの愛の実を結ぶことができるのです。使徒たちの手紙に、信仰と愛が何よりも頻繁に語られているのは、そのためなのです。もう一度、パウロの手紙から、ユダの手紙までじっくり注意して読んでみてください。伝道に関わり、人を救いへ導くことより、愛によって働くイエス様への信仰が、百倍も強調されています。それはどうしてでしょうか？それは、イエス様がそのように全世界へと教えるようにと、使徒たちが理解したからではないでしょうか。使徒たちは、愛によって働くイエス様への信仰を示し、教えたのです。彼らがわたしたちに望んでいたことは、わたしたちが、お互いに愛し合い、お互いに忠実で誠実であることなのです。お互いに忠実であれば、神もわたしたちや教会に忠実でいてくださいます。しかし、わたしたちが愛と信仰にもとづいて一つにならないとすれば、父が御子をこの世に送ってくださったことを、だれが信じてくれるでしょうか？ですから、イエス・キリストの体として、お互いに忠実でありましょう。わたしたちが、お互いに忠実であれば、神もわたしたち、そして教会に忠実でいてくださいます。そして、そこから、たくさんの人々が救われることになるのです（使徒行伝第2章44節から47節）。

もう一度言います。わたしたちがイエス様にあって一つになることにより、父がイエス様を世界の救い主として世に送ってくださったことが、世界の知るところとなります。わたしたちは、これを信じなければなりません。これは、とても簡潔なメッセージなのです。ですから、愛によって一つになりましょう。教会に人を集めるための、より良い方法や戦略など必要ありません。人を引き寄せるために、福音を魅力的、友好的にする方法を考える必要もありません。イエス様が真に世界の救い主だと信じて、

イエス様が世に忠実だと、ただ信じましょう。イエス様が、わたしたちの中で、そして、世界中でその御心をなされるように望みましょう。愛によって一つになりましょう。そして、そこで世界中に神の善が伝わる様を、見守るのです。

イエス・キリストの教会として最後に望むことは、イエス様がおられるところにわたしたちも共にいて、神から生まれた御子イエス様の栄光を見ることです。イエス様がヨハネによる福音書第17章24節の中で言われました。「父よ、わたしに与えてくださった者たちも、わたしのいる所に共にいて欲しいと思います。あなたがわたしに与えてくださったわたしの栄光を見るためです。世の基礎が置かれる前から、あなたがわたしを愛してくださいましたからです。」イエス様は、わたしたちが共にいて、その栄光を見ることが望みだと、父に言われていることは明らかです。ああ、なんとすばらしいことでしょう。わたしたちが心から愛するお方が、わたしたちを求めておられるなんて！わたしたちの愛が報われるなんて、なんて素敵なことでしょう！パウロと共に「わたしの願いを言えば、この世を去ってキリストと共にいることであり、実は、その方がはるかに望ましい」（ピリピ人への手紙第1章23節）と宣言したくなります！頭と共にいる、これが、イエス・キリストの体の希望なのです！頭のない体を想像できないのと同じように、イエス・キリストのない教会を想像することはできないのです。世の始まりから、わたしたちの運命は、イエス様のおられるところに共にいて、彼の栄光を見ることなのです！

ヨハネによる福音書から引用した部分は、天の御国のことを示しています。天の御国は、イエス・キリストの栄光に満たされた場所です。そこはイエス・キリストのすべてなのです。イエス様がおられる場所であり、

そして、天の御国は主の内にあります。天の御国は、イエス様に満たされているということから、天の御国がイエス・キリストそのものだと言っても過言ではありません。天の御国は、わたしたちが、目の前でイエス様の栄光を見ることができる場所なのです。このことを理解すると、イエス様が戻って来られ、わたしたちを集められ、イエス様のおられるところに集まる日を心待ちにすることは自然なことです。そして、また、わたしたちのこの世での最善の思考、目標は常にイエス・キリストであって、イエス・キリストのみでなければなりません。それは、イエス様が、わたしたちの過去、現在、そして未来だからです。さらに、わたしたちの永遠の存在が、イエス様の御名のもとにあるからです。また、わたしたちは、「天から賜わるそのすみかを、上に着ようと切に望みながら、この幕屋の中で苦しみもだえている…わたしたちは心強い。そして、むしろ肉体から離れて主と共に住むことが、願わしいと思っている。」(コリント人への第二の手紙第5章2節から8節)と思うようになるのです。

イエス様がこれからなされることを考えると、イエス様を求める気持ちはさらに、より大きくなります。わたしたち、つまり、教会は、心がもたえるかのように「イエス主よ、きたりませ。」(ヨハネの黙示録第22章20節)と祈りで一体となり、イエス様の再臨を熱心に心待ちにしているべきなのです。イエス様の再臨を望み、わたしたちが一体となることは、欠くことのできない最も重要なことでしょう。頭のない体が不完全であるのと同じで、手や足がない体もまた、不完全なのです(わたしたちは体の一部分ですから、わたしたちの望みが一つになっていなければなりません。コリント人への第一の手紙第12章3節から27節)。わたしたちは一つになり、わたしたちの頭を待つ必要があります。イエス・キリストが来られ

るとき体は完全なものとなり、わたしたちは、永遠の愛と栄光のもと一つとなるのです。わたしたちは「神の日の到来を熱心に待ち望んでいる」べきなのです（ペテロの第二の手紙第3節12章）。

イエス様の再臨は、不信心な世界にとっては非常に恐ろしいものです。しかし、わたしたちのように救われた者にとっては、すばらしいことです。そして、イエス様の再臨によって、すべてが完全なものになるでしょう。わたしたちは、幼子のような信仰で、「本当にはっきりとあなた方に告げる。わたしを信じる者は永遠の命を持っている」（ヨハネによる福音書第6節47章）という約束信じているのですから、主の再臨に自信を持ちましょう。イエス様の忠実以外に頼るものはありません。イエス様は、わたしたちを救うと約束してくださり、その約束を十字架の血によって証印されました。イエス様は生き返られ、わたしたちもまた、慰めの日を心待ちに待ちましょう。わたしたちの心も生き返るのです。イエス様が生きておられるから、わたしたちも生き、また生きなければなりません。わたしたちの神イエスと、その父と共に家族として永遠に生きるのです。この世がこれらのことを受け入れられないことを、わたしたちは知っています。この世はこのようなことを愚かだと思っています。ましてや、不信心な世界では恐ろしいことなのです。しかし、主の聖霊によって証印をおされたわたしたちには、「しかり、アアメン」（ヨハネの黙示録第1章7節）と言える自信があるのです。

神の目的は、すべての聖人がイエス様のもとに集まることによって達成されます。その日が来ることを何よりも強く、皆で望みましょう。どんな理由であれ、言い訳を言うのは止めましょう。イエス様の再臨を妨げるような考えはすべて捨てましょう。イエス・キリストは主を待つ人を望ま

れています。イエス様は、主と共にいたいと切望する人を望まれています。イエス様は、だれよりもイエス様を、何よりもイエス様を優先する人を望まれています。イエス様は、そのように主を待ち望んでいる人、イエス様の再臨を心待ちにしている人のもとにやって来られるのです（ヘブライ人への手紙第9章28節、テモテへの第二の手紙第4章8節）。

世界の創造されたもの、創造されていないものすべてが切なる思いでイエス様の再臨を待ち望んでいることなのです。そして、教会としてイエス様の再臨を待ち望んでいることはもっとも当たり前ことでしょう。（ローマ人への手紙第8章19節から25節、ヨハネによる福音書第17章24節）。イエス様がこうおっしゃっています。「しかり、わたしはすぐに来る」（ヨハネの黙示録第22章20節）。二千年近くにわたって、イエス様は、わたしたちの天の家、そして、体を完璧なものにする準備をされておられます（ヨハネによる福音書第14章3節、エペソ人への手紙第5章25節から27節）。イエス様は、この長い間、ずっと準備されているのです。わたしたちも主のお手伝いを共にしましょう。御言葉を実らせましょう。そして、信仰と愛によって一つとなり、イエス様の再臨を早めようではありませんか。

最後に、もう一度だけ言いたいですが、わたしたちの未来は明るく、輝かしいものです。勇敢になりましょう。イエス様は、世界の救い主で、イエス様を信じるすべての人を救う忠実なお方です。イエス様は、わたしたちを見ておられ、わたしたちと共にいたいと望んでおられます。イエス様は、わたしたちの中に、疲れきり、弱くなった人々が数多くいることを知っておられます。わたしたちの多くが最も小さい兄弟の一人だということもご存知です。イエス様は、愛しておられる人々をお忘れではありません

ん。わたしたちに向けられたイエス様の思いは良いもので、わたしたちの謙遜の心が、未来の栄光をよりいっそう喜ばしいものにさせるのです。ですから、勇気を持って、次の息を求めることよりもイエス様を求めましょう。小さな子供のように、イエス様の御前に行き、イエス様と共にいましょう。完全なる敬愛の念を持って、イエス様の御前にとどまりましょう。イエス様は、わたしたちの神であり、わたしたちの救い主であります。御子を送ってくださった父なる神を讃え、信仰と無罪のもと、御子の前にひざまずきましょう。主は、わたしたちのことを知っておられます。わたしたちには主に献げるものなど何もないことをご存知です。「わたしのところに来なさい。そうすれば、わたしがあなた方に安らぎを与えよう。わたしを信じる者は永遠の命を持っている。」(マタイによる福音書第11章28節、ヨハネによる福音書第6章47節)

イエス・キリストにある方々が、この本によって元気づけられることを願っています。神が皆さんと共におられ、わたしたちの目と心がいつも主に注がれますように。わたしたちのお互いの愛が、すばらしい噴水のように溢れ出しますように。わたしたちが、イエス様の内に一つとなりますように。ハレルヤ！来たりませ、主イエスよ、早く来たりませ！アーメン。